

## 「自分用チョコ」に感じたことから

### 自分にご褒美？

今年もまた、バレンタイン・デーの時期が来ました。デパート、スーパー、コンビニまでどこに行ってもチョコレート商戦花盛りといったところです。マスメディアでは、義理チョコなんて最近あまり大きく取りあげられなくなっていますが、このところ「自分用チョコ」の購入者が増加していることがちょっと話題になっているようです。私が初めて知ったのは今年のバレンタインの時にTV番組で自分のために高級チョコを買うOLや主婦を取りあげていたときでした。また、私の勤務するこどもセンターでも昨年から中高生対象にバレンタインチョコ作りの行事を行っていますが、そこでも、自分用にチョコを作る女子中高生がいて、「子どものなかにもいるのだなぁ」と思っていました。高級チョコを買うOLや主婦は「自分へのご褒美」の意味で買っているような内容で放送されていたように記憶しています。（この原稿を書いている間に2月7日付朝日新聞朝刊にこれについての記事が載りました。「高級品『私にご褒美』」との見出しでした。）一体いつからこのような傾向がみられるようになったのでしょうか。上述朝日新聞記事にはプランタン銀座の広報担当者のコメントとして、1996年のアトランタオリンピックで女子マラソンの有森選手が「自分で自分をほめたい」と言った以降からそのような傾向が強まったとみているとあります。

私も同様に感じています。それというのも、チョコの問題が気になる以前に、自分へのご褒美としてダイアのネックレスなどを買ったり、贅沢な海外旅行をしたりするOLなどの大人の女性が結構いるものなぁと感じ始めたのが、ちょうど、有森さんの発言以降の時期とほぼ重なっているからです。それにしても、この傾向がずいぶん広がりをみせているようです。そして、子どもたちへも広がっていくのでしょうか。

### なぜか違和感

有森さんが「自分で自分をほめたい」と言ったとき、多くの人はその言葉に共感したしたと思います。「自分で自分をほめたくなるほど、苦労しながら出した最高の結果だったんだなぁ」と私も感動してTV画面を見ていた記憶があります。

しかし、なぜか、その後の「自分へのご褒美」を行う人たちには違和感を覚えます。それはなぜか。有森さんのように偉業を成し遂げていないからか。そうではありません。たしかに、一人ひとりに目を向ければ、何気ない日常のなかにも端から見ては些細なことのようなことが本人には大変な辛いこともあるでしょう。そうであれば、年に一度や二度くらい、自分で自分の労をねぎらったり、自分で自分をほめたりしたくなる気持ちは誰にでもあると思います。だから、自分にご褒美を考えると自然なのかもしれません。ただ、それがあまり表だって一般に広がり、すなわち社会全体の前面に出過ぎ、意図的ではないにせよ相対的に他人を思う気持ちが劣後する様相を呈していると、なんとなく感じているから最近の「自分へのご褒美」に違和感を覚えるのかもしれない。

### 違和感のもう一つの正体？

上述の違和感は、有森さんの発言以降のことなので、約10年くらいモヤモヤとくすぶり続けていたのですが、上に挙げた理由だけでは納得できないものがあります。それなので、「かもしれません」でした。私には、もっと何か、危険信号を受けているような不安混じりの感じだからです。そのようななか、最近、平凡社新書の岡田尊司（おかだたかし）著『人格障害の時代』という本を手に入れました。その本を読み進むうちに自分の感じていた「不安混じりの感じ」の正体をみたというか、何かがカチッと音を立てて頭のなかで接続されました。著者は精神科医で現在は京都医療少年院に勤務しているようです。著者自身の言葉を借りれば「人格障害を社会の角度から捉えようとする試み」の本です。

私のなかで何かが強く反応したこの本の部分を数カ所紹介したいと思います。

ここでは、「社会的な規模で起きている人格障害の増加、浸透という事態は、個々のケースの原因だけで説明することは不可能である。そこには、社会的、歴史的なスケールの要因が潜んでいるはずである。」とし、「親世代の子育てに対する態度の変化にしろ、社会倫理や教育の変質にしろ、そこには、さらに底流をなす共通の要因が働いている。それは、現代人を広く支配する精神構造であり、ライフスタイルであり、価値観である。そこからは、さらに深部に横たわる、根本的問題が見えてくる。それは、現代人が示す自己愛性であり、現代人全体が示す自己愛的精神構造である。」という。著者によれば自己愛性が現代社会で顕著になってきたのは20年ほど前からということである。(その指摘例としてクリストファー・ラッシュ『ナルシシズムの文化』と小此木啓吾『自己愛人間』を挙げている。)そして、「この自己愛的な精神構造、社会構造が、人格障害を生み出す格好の培養装置として働くのである。

それは、二重の意味において、皮肉なほど効率的に機能する。一つは、自己愛を温存し、それを満たし続けるという方向においてであり、もう一つは、その試みに失敗することによってである。前者によって生み出されるのが、肥大した自己愛的幻想や完璧性信奉を抱いた自己愛性人格障害や強迫性人格障害のようなタイプであり、後者によって生み出されるのが、自己否定と無力感に打ちひしがれた、境界性人格障害や依存性人格障害、回避性人格障害のタイプである。」といい、さらに「時代は『自己愛の時代』から『自己愛障害の時代』へと移り変わろうとしているのである。それは『人格障害の時代』の幕開けに他ならない。」という。

ここでは、これ以上話は進めませんが、興味を持った方は読んでみてください。私自身ここに書かれたことを十分検討していないので、全面的にその通りだとは言えませんが、かなり刺激を受け、うなずける点は多々あります。誤解のないように少々説明を加えると、著者は、いくつかに分類されている人格障害に該当するような人格障害「的」なもの、どれも誰にでも多少なりともあるといえます。ただ、その一部や全部が社会に受け入れ

られないほど突出すると人格障害とされるというお考えのようです。ですから、自己愛自体を否定するのではなく、社会全体やそれによって個々人が、「ほどよさが損なわれ、極端になる」ことに警鐘を鳴らしているのだと、私は読みました。

(次号につづく)

亀山憲一 [会員・フリーで活動中の法学研究者  
(犯罪学・刑事法)]

